日本能書列伝（一）

―― 日本古書論を典拠として ――

永　由　徳　夫

The Lives of the Japanese Master Calligraphers (1)

―― Based on Japanese old Calligrapfic theory books ――

Norio NAGAYOSHI

群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編
第 66 巻　25―35 頁 2017 別刷

群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編　第66巻　25―35頁　2017

日本能書列伝（一）
――日本古書論を典拠として――

群馬大学教育学部国語教育講座　永　由　徳　夫

序に代えて

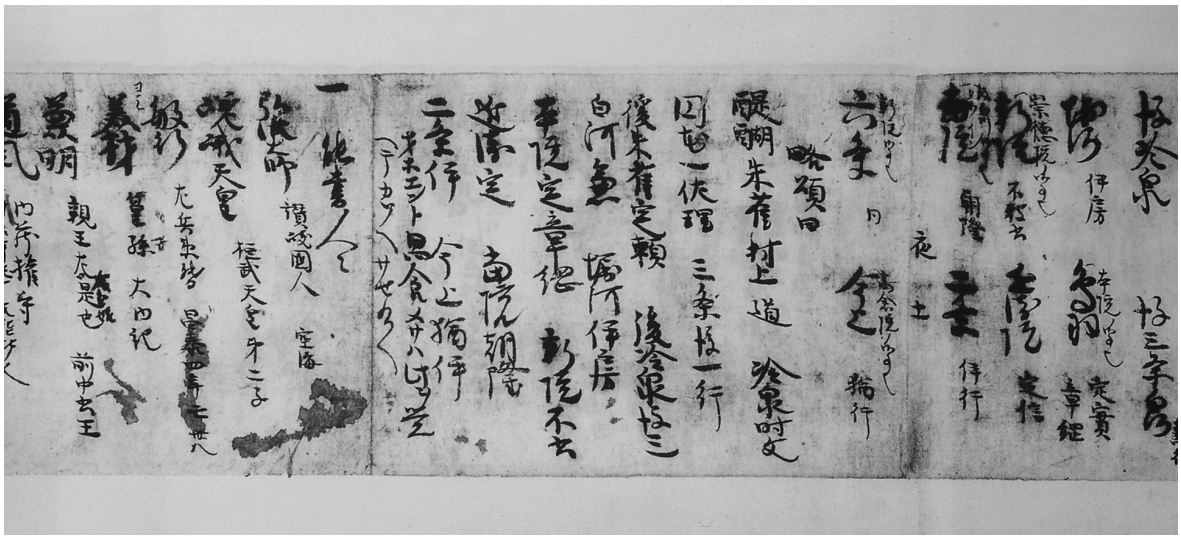
本稿は、日本の古書論を典拠として、日本能書列伝を編まんとするものである。能書あるいは能書家とは、「書にすぐれた人」「書の上手な人」をいうが、古書論を典拠として伝記をまとめることで、往時の「能書」とはどのような人物を指したのか、明らかにしていきたい。

能書列伝の類はこれまでになかったわけではない。たとえば、『書道全集』全二八巻（平凡社　一九五四～六一　補遺・別巻一九六七～六八）には、各巻に「書人小傳」が附録されている。時代区分に拠らず、能書を中心にまとめた『書道藝術』全二四巻（中央公論社　一九七〇～七三）といった大部なシリーズもある。また、『日本書道辞典』（二玄社　一九八七）や『書の総合事典』（柏書房　二〇一〇）といった所謂工具書から、さらには、各種「書道史」のテキストより丹念に能書を拾っていけば、能書を一覧にし、小伝を編むことも可能であろう。ただ、それは長い研究の蓄積による今日的評価に多分に左右されるものである。本稿で目指すのは、往時の人々がどのように能書を捉え、評価したのか、という視点により、能書列伝をまとめ直したいということである。そして願わくは、ただ能書を列挙するのではなく、能書同士の関係性を明らかにしながら記述することで、一つの「日本書道史」を形成するよう心掛け、従来の個々の能書の伝記に終始するものとは一線を画すべく企図するものである。

一　日本古書論における能書

本稿で参照した古書論は別記するが、主として対象とするのは、中古・中世の書論である。中でも、日本書論の嚆矢とされる世尊寺家六代目・藤原伊行『夜鶴庭訓抄』（一一六五年頃成立）には、巻末に「能書人々」の項を設けており、いかに「能書」に対する関心が高かったかが窺える。また、同書には「内裏額書たる人々」「悠紀主基御屏風書人々」の項があり、具体的な能書活動が記されている。それがどのようなものであったか、以下に示すこととする。

「悠紀主基屏風」は、天皇即位後、初めて行われる新嘗祭、即ち大嘗会の際に制作された屏風であり、この屏風色紙形の揮毫に従事する者にとっては、一世一代の大仕事であり、栄ある晴れ舞台でもあった。『夜鶴庭訓抄』最古の写本と考えられる京都・青蓮院蔵本及びこれに続く古写本である宮内庁書陵部蔵本（【図1】）に基づくと、天皇名及び揮毫者については以下のようになる。〔　〕内は揮毫者である。



【図１】『夜鶴庭訓抄』（宮内庁書陵部蔵　室町時代写）

醍醐〔美材〕、朱雀・村上〔道風〕、冷泉〔時文〕、円融・花山・一条〔佐理〕、三条・後一条〔行成〕、後朱雀〔定頼〕、後冷泉・後三条・白河〔兼行〕、堀河〔伊房〕、本院（鳥羽）〔定実〕、新院（崇徳）〔不被書〕、近衛〔定信〕、当院（後白河）〔朝隆〕、二条・今上（六条）〔伊行〕

宮内庁書陵部蔵本では、今上を六条天皇とするが、これに先んずる青蓮院蔵本での今上は二条天皇である。ちなみに、近世の流布本であり、今日通行する『群書類従』所収の『夜鶴庭訓抄』では、「六条院〔伊行〕」に加え、「当今（高倉）〔朝方〕」と追記している。

では、以下に本稿で典拠とした中古・中世の書論を列挙する。

『夜鶴庭訓抄』

世尊寺家六代目・藤原伊行著。一一六五年頃成立し、後継の書論に大きな影響を与えた。「能書人々」の項があり、弘法大師・嵯峨天皇・藤原敏行・小野美材・兼明親王・小野道風・紀時文・藤原文正・藤原佐理・具平親王・藤原行成・延幹君・菅原文時・藤原定頼・小野恒柯・橘逸勢・藤原関雄・素性法師・源兼行・藤原伊房・源長季・藤原定実・藤原定信の名を挙げる（【図２】）。後世の写本では、『夜鶴庭訓抄』の著者である藤原伊行の名も加えられる。

『才葉抄』

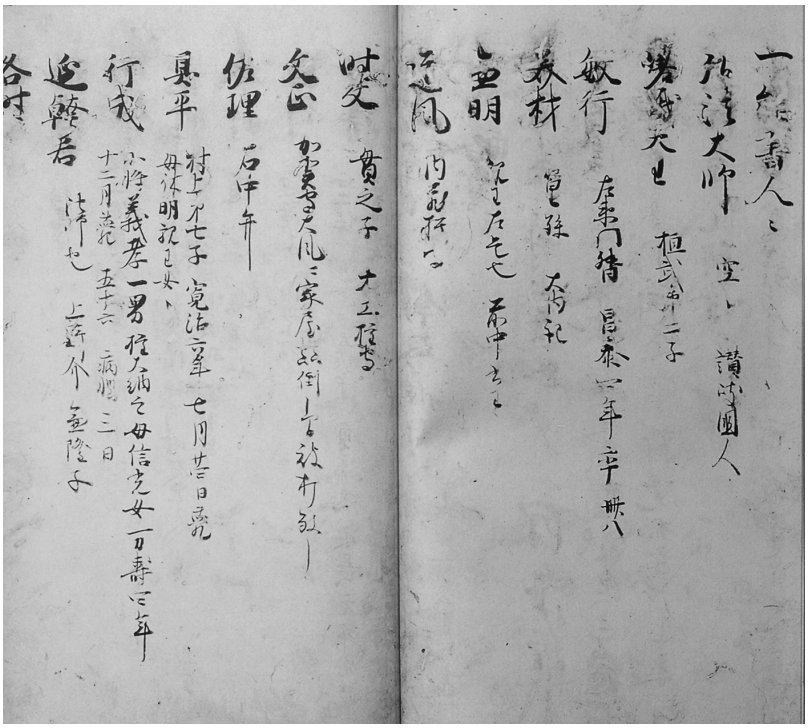
藤原教長が世尊寺家七代目・藤原伊経に口授したもの。一一七七年成立。『夜鶴庭訓抄』と同様、世尊寺家の書を伝えたもので、これにより世尊寺流が理論づけられた。道風・佐理・行成のそれぞれの長短を論じ、書品論としての価値も高い。

『金玉積伝集』

兼明親王の著とされる。書法や故実について述べたもの。書に関する貴重な古諺を収録している。

『夜鶴書札抄』

世尊寺家八代目・藤原行能が『夜鶴庭訓抄』を書写し、見解を加え



【図２】『夜鶴庭訓抄』（京都・青蓮院蔵　南北朝時代写）

たもの。行能の代より「世尊寺」を名乗るようになったが、能書の家としての意識を高めたものの、徐々に書風の定型化も招くことになった。本書は『夜鶴庭訓抄』をほぼ忠実に踏襲する一方、能書から藤原佐理の名を落としている。

『心底抄』

世尊寺家九代目・藤原経朝の著。世尊寺流に特化せず、書式・用筆・学書・文房について、書道の大綱を平易に解説したもの。

『右筆条々』

『心底抄』の拾遺篇ともいうべき一書である。一三二二年成立。経朝の孫の著とする記載があり、世尊寺家一一代目・行房が著者として推定されている。行房は、弟の一二代目・行尹とともに、尊円親王に書法を伝授した。

『麒麟抄』

全一〇巻と書論の中では大部である。著者を空海・藤原行成・兼明親王等とする説があるが当たらない。内容から見て、一四世紀中頃、南北朝時代の成立と考えられる。書式・用筆・文房等図解を含め、幅広く記述する。

『入木抄』

尊円親王の著。一三五二年成立。中古・中世の書論を集成したもの。能書として、光明皇后・中将姫・弘法大師・嵯峨天皇・橘逸勢・藤原敏行・小野美材・菅原道真・小野道風・藤原佐理・藤原行成を列挙する。『夜鶴庭訓抄』『才葉抄』とともに「入木三部集」を成す。尊円親王は青蓮院流の祖。

『尺素往来』

往来物の一つで、一条兼良〈一四〇二―一四八一〉の著。書論に特化したものではないが、王羲之ら中国の能書七名と嵯峨天皇・弘法大師空海以降の能書を挙げる。世尊寺流が家様と呼ばれて繁栄を極めたこと、当時は尊円親王の書が軌範とされたこと、などの記述がある。

二　日本能書列伝（一）

以下に、日本能書列伝（一）として二〇名の小伝をまとめる。（一）を「三跡」の一人、藤原佐理で止めたのは、続く藤原行成から日本の書が大きな転換期を迎えるからである。続編は別の機会に掲載したい。

【凡例】

一．配列は原則として生年順（生没年不詳の場合は推定）としたが、書道史の流れが摑めるように、一部入れ替えた箇所がある。

二．出典とは、その能書に関する記述のある古書論名である。

三．能書の故事に関しては、適宜古典文学作品より補った。

四．字数は五〇〇字以内とし、能書によって著しく分量に差が出ないよう心掛けた。

光明皇后（こうみょうこうごう）

大宝元年〈七〇一〉―天平宝字四年〈七六〇〉。聖武天皇妃。父は藤原不比等、母は橘三千代。名を安宿媛（あすかべひめ）、また光明子ともいう。一六歳で妃となり、天平元年〈七二九〉二九歳で皇后となる。聖武天皇とともに仏教を篤く信仰し、天皇崩御後も一人娘孝謙天皇の生母として政界に重きをなした。その書として「楽毅論」「杜家立成雑書要略」が伝わる。特に「楽毅論」は、王羲之の「楽毅論」を臨模したものとされ、真跡の伝わらない王羲之の書風を偲ぶことができるが、光明皇后の筆跡はより豪胆である。巻末に別紙を貼り「藤三娘」との署名があることから、皇后の筆と伝わる。但し、この書は天平一六年〈七四四〉、皇后四四歳の時のものであり、不比等の娘を意味する「藤三娘」の署名に疑義を呈する向きもあるが、まず皇后の真筆とみて差し支えあるまい。

出典：『入木抄』

参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

中将姫（ちゅうじょうひめ）

天平一九年〈七四七〉―宝亀六年〈七七五〉。右大臣藤原豊成の女。父の豊成は藤原鎌足の曾孫にあたる。中将姫は五歳で生母と死別する。姫は九歳の折に、聖武天皇と光明皇后の一人娘孝謙天皇に召し出されるも、継母の妬みにより虐待を受けるようになる。その後、当麻寺に入って尼僧となり、二六歳の折、当麻曼荼羅を織ったとされる。宝亀六年〈七七五〉、二九歳で入滅。継母の迫害を受けている最中に写経一〇〇〇巻を成したというが、今日、能書としてはその名はほとんど挙がらない。『入木抄』には中将姫の名が見え、「当麻曼荼羅感得の人也」と注記する。その数奇な運命は「中将姫伝説」として世に広まり、さまざまな戯曲の材となった。

出典：『入木抄』

朝野魚養（あさのぬかい）

生卒年不詳。忍海連首麻呂（おしぬみのむらじおびとまろ）の後裔で、一説に吉備真備の子とも伝えられるが、その伝記は詳らかでない。延暦六年〈七八七〉に正六位上より従五位下に叙せられ、同七年〈七八八〉に典薬頭に任ぜられた。同一〇年〈七九一〉、忍海連から新たに朝野宿禰を賜った。「正倉院文書」によると経巻四〇四七巻の外題を書したとされ、また、『宇治拾遺物語』にも南都七大寺の額をすべて揮毫した、とある。空海は入唐以前に魚養に師事したとする説もある。「薬師寺大般若経」の伝称筆者としてその名が冠せられる。墓は元興寺十輪院にある。

出典：『入木抄』

参考文献：『日本書道辞典』

弘法大師・空海（こうぼうだいし・くうかい）

宝亀五年〈七七四〉―承和二年〈八三五〉。延暦二三年〈八〇四〉、三一歳で遣唐使に随い、留学僧として入唐。真言密教の奥義を授けられ、高野山に金剛峯寺を創建、真言宗の開祖となった。天台宗開祖、伝教大師最澄に宛てた書翰「風信帖」をはじめ、「灌頂暦名」「金剛般若経開題」「聾瞽指帰」「三十帖策子」「崔子玉座右銘」等がその真筆として現存する。

「崔子玉座右銘」には俯仰法を駆使した運筆が見られるが、『入木抄』には、「弘法大師の執筆法には、図絵をのせられたり。それもいささか今のとりやうにはたがはず候間、又之を図く。」という記述があり、大師の執筆法が図示されている。また、『入木抄』には、空海入唐の折、王羲之の書した王宮の壁字が破損したまま、それを中国では修復できる人材がおらず、天子勅命により空海が書き直し、晋代より唐朝に至るまで久しく絶えた書の道を再興させたという故事が記されている。今日、空海は、嵯峨天皇・橘逸勢とともに「三筆」の一人として夙に知られるが、『夜鶴庭訓抄』では、菅原道真・小野道風とともに「三聖」と総称される。また、内裏一二門の内、南面の三額「美福・朱雀・皇嘉門」の揮毫者としてその名が見える。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『麒麟抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

嵯峨天皇（さがてんのう）

延暦五年〈七八六〉―承和九年〈八四二〉。第五二代天皇。桓武天皇第二皇子。兄の平城天皇の跡を継ぎ、大同四年〈八〇九〉、二三歳で即位、在位一四年で弟の淳和天皇に譲位した。唐風文化が浸透する中、天皇自ら詩文や書を能くし、文化興隆の中心的存在であった。特に書においては空海・橘逸勢とともに「三筆」と総称される。真筆として「哭澄上人詩」「光定戒牒」が伝存する。「光定戒牒」は最澄の弟子光定の法器をたたえ、楷行草の各体を用いて揮毫している。『夜鶴庭訓抄』「内裏額書たる人々」にて、内裏一二門の内、東面の三額「陽明・待賢・郁芳門」の揮毫者としてその名が記される。

空海と書の優劣を論じた時、嵯峨天皇は唐人の書として所蔵の一巻を示したが、実はそれが空海入唐中の書であったことがわかり、大いに恐懼した天皇は、以後空海と書の優劣について論ずることがなくなった、という故事が伝わる。この話は後人の偽託であるが、「哭澄上人詩」「光定戒牒」には空海書法の影響が見てとれ、嵯峨天皇が空海に一目二目置いていたことは事実であろう。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

橘　逸勢（たちばなのはやなり）

延暦元年〈七八二〉？―承和九年〈八四二〉。左大臣橘諸兄の曾孫。延暦二三年〈八〇四〉、留学生として、空海・最澄らとともに入唐した。在唐二年の間、唐文化の摂取に努めたが、唐人はその才を賞して橘秀才と呼んだという。書名が高く、弘仁七年〈八一六〉に「興福寺南円堂銅燈台銘」、同九年〈八一八〉には嵯峨天皇の勅を奉じて内裏一二門の内、北面の三額を揮毫したとされ、『夜鶴庭訓抄』には「安嘉・偉鑒・達智門」の揮毫者としてその名が見える。承和の変に連座した罪に問われ、伊豆へ流罪となり、その途次遠江国で病死した。死後赦免となり、仁寿三年〈八五三〉に従四位下が追贈され、名誉回復となった。ただ、この経緯が影響を及ぼしたか、空海・嵯峨天皇とともに「三筆」と称されながら、真筆は伝わっていない。「伊都内親王願文」〈八三三〉がその筆として現存するが確証はない。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

藤原関雄（ふじわらのせきお）

延暦二四年〈八〇五〉―仁寿三年〈八五三〉。藤原北家、参議藤原真夏の五男。官位は従五位下・治部少輔。天長二年〈八二五〉、二一歳の若さで文書生に合格したが、閑居を好んで出仕せず、東山に隠棲したことから東山進士と呼ばれた。のちに淳和上皇に召し出され、近臣として迎えられた。琴の名手として知られ、上皇より秘譜を下賜されるほどであった。また、草書を得意とし、仁明天皇の命で上皇ゆかりの離宮である南池院・雲林院の壁書を揮毫したことが、『日本文徳天皇実録』に記されている。遺墨として、天台宗の僧侶、円珍の入唐の際に書した「中務位記」（園城寺蔵）・「充内供奉治部省牒」（東京国立博物館蔵）が伝わる。

出典：『夜鶴庭訓抄』

参考文献：『日本書道辞典』

小野恒柯（おののつねえだ）

大同三年〈八〇八〉―貞観二年〈八六〇〉。父は正五位下・出羽守滝雄。参議小野篁の従弟。承和二年〈八三五〉に少内記となり、以後諸役を歴任し、貞観元年〈八五九〉に従五位上に叙された。承和八年〈八四一〉に賀福延らが渤海使として長門国に来着した際には、存問渤海客使を務めている。『日本三代実録』によれば、若い頃より学問を好み、文才があり、ことに書は世に卓絶し、草書・隷書を能くしたという。世人は皆恒柯の書を手本とし、その書状を手に入れた者は愛蔵したと伝わる。但し、その真筆は伝存していない。能書として『夜鶴庭訓抄』には恒柯の名が挙げられるが、他の古書論ではその名は見られない。

出典：『夜鶴庭訓抄』

参考文献：『日本書道辞典』

藤原敏行（ふじわらのとしゆき）

生年不詳―延喜元年〈九〇一〉。三十六歌仙の一人として著名であるが、当代一流の能書としても知られている。小野道風は、空海とともに敏行の書を絶賛したという。特に「神護寺鐘銘」は、銘文の序を橘（たちばな）広相（のひろみ）、銘を菅原是善（すがわらのこれよし）（道真の父）、書を藤原敏行、といった当時の三名家が担当したことから、古来「三絶の鐘」と呼ばれている。確証のある敏行の書としては現存唯一のもので、重厚でゆったりとした線質に特徴がある。元慶二年〈八七八〉に大極殿の額を揮毫したことが『江談抄』に記され、寛平四年〈八九二〉には渤海国への牒を認めたことが『日本紀略』に見えるなど、栄えある能書活動を展開した様子が伝えられている。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』『書の総合事典』

小野美材（おののよしき）

生年不詳―延喜二年〈九〇二〉。小野篁の孫。当時能書の誉れが高く、『夜鶴庭訓抄』「内裏額書たる人々」にて、内裏一二門の内、西面の三額「談天・藻壁・殷富門」の揮毫者としてその名が記される。この一二門は、南面が空海、北面が橘逸勢、東面が嵯峨天皇という、所謂「三筆」が揮毫しており、美材が彼らに比肩する技量の持ち主と考えられていた様子が窺える。また、『帝王編年記』（寛平九年十一月二十日条）に醍醐天皇の大嘗会悠紀主基屏風の色紙形の揮毫者として選任されたことが記され、『夜鶴庭訓抄』にも同様の記述が見える。当代屈指の能書であったことは古書論はじめ諸史料から明らかであるが、今日では残念ながら「三筆」と同格の扱いは受けていない。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』『書の総合事典』

素性法師（そせいほうし）

承和一一年〈八四四〉頃―延喜一〇年〈九一〇〉頃?。桓武天皇の曾孫。六歌仙の一人、僧正遍照（良岑宗貞）の子。俗名は諸説あるが、一説に良岑玄利（よしみねのはるとし）。素性法師は三十六歌仙の一人として名高く、宇多天皇に供奉して諸所で和歌を奉じたという。一方で、書については醍醐天皇の寵が厚く、延喜九年〈九〇九〉に御前に召されて屏風歌を書いたとされるが、華やかな能書活動はほとんど伝わらない。素性法師の名は『夜鶴庭訓抄』に見られるが、他の古書論には記述されていない。

出典：『夜鶴庭訓抄』

菅原道真（すがわらのみちざね）

承和一二年〈八四五〉―延喜三年〈九〇三〉。参議従三位菅原是善の子。学問の神、天神様と称され、親しまれている。学問に傾注し、詩文にすぐれ、国風文化の形成に尽力した。宇多天皇の信任厚く、右大臣まで進んだが、醍醐天皇の御世に藤原時平等の中傷により、延喜元年〈九〇一〉、大宰府に流されたことは夙に知られている。五九歳で没し、死後正一位太政大臣が追贈され、天満宮の称号も許された。これほど著名であり、能書としても知られたが、真筆は伝存していない。「百錬鏡」が道真の書とされるが確証はない。『夜鶴庭訓抄』では、空海・小野道風とともに「三聖」と総称され、『入木抄』では道真のことを「聖廟」と称し、「そののち聖廟抜群也。聖廟以後野道風相続す。此の両賢は筆体相似たり」と述べている。もしこれを根拠とするならば、道真の書が鷹揚なものであったことが想像される。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『麒麟抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』『書の総合事典』

紀　貫之（きのつらゆき）

貞観一二年〈八七〇〉頃?―天慶八年〈九四五〉頃?。『古今和歌集』〈九〇五〉撰者。『古今和歌集』（賀・三五二）の詞書に「本康親王の七十の賀のうしろの屏風によみてかきける」とあり、屏風絵の画賛を詠み、揮毫したという記述がある。また、『源氏物語』（絵合）には、絵巻の詞を書したという記述が見られ、能書としても評価されていたと考えられる。「寸松庵色紙」「高野切」「名家家集切」等の伝称筆者としてその名が冠せられるが、いずれも後代の筆である。その真跡は、貫之自筆の『土佐日記』の一部を藤原定家や藤原為家が臨写したものによって推量するほかない。

参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』『書の総合事典』

小野道風（おののみちかぜ・とうふう）

寛平六年〈八九四〉―康保三年〈九六六〉。小野篁の孫。葛紘の子。官位の昇進ははかばかしくなかったが、当代一流の能書として活躍した。和様の開祖として知られ、「智証大師諡号勅書」「屏風土代」「玉泉帖」「三体白氏詩巻」等が現存する。『夜鶴庭訓抄』には、悠紀主基屏風の清書役として朱雀・村上両天皇の折に揮毫するなど、華々しい能書活動があったことが記されている。また、空海・菅原道真とともに「三聖」と総称され、当時より別格の扱いであったことが推察される。『入木抄』には、「万里の波濤を隔て、名を唐国に駆す」とあり、道風の名が唐土にまで伝わっていたと記している。また、「聖廟以後野道風相続す。此の両賢は筆体相似たり」とも記述されるように、道真の書法を継承したと考えられていたようである。その書は「野跡」として尊重された。藤原佐理・藤原行成とともに「三跡」としてきわめて著名であるが、『入木抄』ではこの三人の能書を「三賢」として総称している。

出典：『夜鶴庭訓抄』『才葉抄』『夜鶴書札抄』『麒麟抄』『入木抄』
参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

紀　時文（きのときふみ）

生卒年不詳。貫之の子。近江少掾、少内記、大内記を経て、大膳大夫に至った。大中臣能宣、清原元輔、源順、坂上望城とともに、〝梨壺の五人〟と呼ばれ、天暦五年〈九五一〉、撰和歌所寄人となり、『万葉集』の読解や『後撰和歌集』の撰集にあたった。『夜鶴庭訓抄』「能書人々」の他、『尺素往来』に藤原文正・小野奉時・菅原文時とともに「四輩」の一人としてその名が見えるが、遺墨は現存していない。『夜鶴庭訓抄』には、冷泉天皇の折の悠紀主基屏風揮毫者として、時文の名が記されている。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『尺素往来』
参考文献：『日本書道辞典』

藤原文正（ふじわらのふみまさ）

生卒年不詳。『尊卑分脈』には、藤原忠紀の子、文正の箇所に「紀氏」とする異本注記があり、これに拠れば文正は紀貫之の孫、紀時文の三男、紀文正と同一人物となる。『夜鶴庭訓抄』「能書人々」の項には「文正　加賀守」と記されるが、『夜鶴書札抄』「天下能書得誉人之事」には紀文正として記載される。また、『尺素往来』に紀時文・小野奉時・菅原文時とともに「四輩」の一人としてその名が見える。遺墨は現存しないが、文正が揮毫した『後撰和歌集』を箱に収めたとする話（『御堂関白記』）や、新銭「乾元大宝」の文字の下書きが小野道風に下命されたが、目が悪く細字の揮毫に難儀したことから、その代役として文正が推挙された話（『九暦』）など、能書活動を推量する故事が伝わる。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『尺素往来』
参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』

小野奉時（おののすけとき）

生卒年不詳。『夜鶴庭訓抄』「能書人々」にその名が見え、また、『夜鶴書札抄』「天下能書得誉人之事」に「奉時　道風之子」と記されるが、その伝記や能書活動は詳らかでない。『手跡習字系図』（曼殊院蔵）に「羲之―道風―奉時」とあることから、父道風より正統な書法を受け継いだであろうことが推量される。『尺素往来』に紀時文・藤原文正・菅原文時とともに「四輩」の一人として挙げられる。

出典：『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『尺素往来』
参考文献：『日本書道辞典』

菅原文時（すがわらのふみとき・ふんとき）

昌泰二年〈八九九〉―天元四年〈九八一〉。道真の孫。高槻の子。文章博士となり、従三位に至った。菅三品と称せられ、『和漢朗詠集』には多くの漢詩文が採択されている。『夜鶴庭訓抄』「能書人々」にその名が挙げられ、『尺素往来』には、『入木抄』にも記される小野道風・藤原佐理・藤原行成の「三賢」に続けて、紀時文・藤原文正・小野奉時とともに「四輩」と称され、当代きっての能書であったことが記されている。

出典：『夜鶴庭訓抄』『尺素往来』
参考文献：『日本書道辞典』

兼明親王（かねあきらしんのう）

延喜一四年〈九一四〉―永延元年〈九八七〉。醍醐天皇の第一六皇子。朱雀天皇・村上天皇・源高明らの異母兄弟にあたる。一時、臣籍降下し、源兼明と名乗ったが、晩年皇籍に復帰し、中務卿となったことから中書王と称された。博学多才で知られ、甥の具平親王と並び称されたことから、兼明親王を前中書王、具平親王を後中書王とも呼ぶ。書名も高く、『江談抄』では「兼明、佐理、行成三人等同之手書也」と絶賛しているが、その遺墨は現存していない。『戯鴻堂帖』中に「海外書」として親王筆とする「暮春帖」の模本二葉が収められ、細井広沢『観鵞百譚』にもその臨模本が収録されるが、親王の原本に拠るものかどうかは不明である。

出典：『夜鶴庭訓抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『日本書道辞典』『書の総合事典』

藤原佐理（ふじわらのすけまさ・さり）

天慶七年〈九四四〉―長徳四年〈九九八〉。書の才能に恵まれ、小野道風に私淑したという。小野道風・藤原行成とともに「三跡」の一人として知られ、華やかな能書活動を展開した。特にその書は「佐跡」として尊重された。『入木抄』では「三賢」の呼称で尊ばれている。『夜鶴庭訓抄』『悠紀主基屏風書人々」には、佐理が円融天皇・花山天皇・一条天皇の三回にわたって清書役を担当したことが記されている。能書にとって最高の栄誉であるこの屏風色紙形の揮毫を三度も担ったのは、他に源兼行のみである。真筆とされる遺墨として、「詩懐紙」「女車帖」「恩命帖」「離洛帖」「頭弁帖」等が現存する。中でも「離洛帖」は、正暦二年〈九九一〉、大宰大弐に任ぜられた佐理が、時の摂政・藤原道隆への挨拶を怠ってしまったため、甥の誠信にとりなしを頼んだ書状であるが、詫び状とは思えぬ自在な筆致で異彩を放っている。その人と為りは、「如泥人」（『大鏡』）と描写されるなど、怠惰な性質によるエピソードに事欠かない。現存する遺墨にも、不如意や不手際を言い訳したり、詫びたりする類が多い。まさにその人柄が、暢達な筆致に表われているのであろう。

出典：『夜鶴庭訓抄』『才葉抄』『夜鶴書札抄』『麒麟抄』『入木抄』

参考文献：『書道全集』『書道藝術』『日本書道辞典』『書の総合事典』『日本書人伝』

三　「手師」と「能書」

ここまで日本古書論を典拠に二〇名の能書列伝をまとめてきたが、往時における「能書」とはどのような人物をいうのか、おぼろげながらその輪郭が摑めてきたのではないだろうか。

『万葉集』には、助動詞「てし」に王羲之の名を用いて表記した箇所が散見される。所謂「能書」のことを「手師」と呼び、「てし」と詠む歌が八首あり（例：六五七「不念常曰手師物乎（おもはじといひてしものを）…」）、「羲之」を誤って「義之」（誤りでなく仮借とする説もある）と書き、「てし」と詠む歌が七首ある（例：三九四「印結而我定義之（しめゆひてわがさだめてし）…」、一三二四「葦根之懃念而結義之（あしのねのねもころおもひてむすびてし）…」）。また、「大王」は通常「おほきみ」「きみ」と読むが、「てし」と詠む歌が四首ある（例：二六〇二「…結大王（むすぶきみ、むすびてし）…」）。「大王」とは、王羲之とその子息、献之を「二王」と併称し、特に羲之を「大王」、献之を「小王」と呼んだことに因る。原文「義之」「大王」は、「手師」（能書）の意の戯訓であり、固有名詞を助動詞として用いた稀有な例といえるであろう。

日本古書論に見られる「能書」とはまさしくこの「手師」のことである。「義之」と書き表したことから推量されるように、「能書」には王羲之に比肩する、あるいはこれに準ずる技量が求められたのであろう。

その技量を証明する具体的な能書活動といえば、「内裏額」の門額を揮毫することが第一に挙げられる。但し、実際問題として、「内裏額」には数に限りがある。『夜鶴庭訓抄』に記されるように、内裏の一二門は、空海・嵯峨天皇・橘逸勢・小野美材に占められ、平安時代前期に既に落成している。よって、平安時代中期の能書は、甘んじて内額を揮毫することで面目を保ったといえよう。その中期の能書にとって最大の栄誉が「悠紀主基屏風色紙形」の揮毫であった。『夜鶴庭訓抄』の著者、藤原伊行も二条天皇・六条天皇の二度にわたって奉仕しただけあり、これを最も重視したと考えられる。

一方で、今日の「書道辞典」の類にその名は見られるものの、それほど重んぜられない人物を能書で掲げている例がある。たとえば、紀貫之の子、時文は〝梨壺の五人〟に数えられるだけあり、今日でも歌人としては名が知られているが、能書としてはさほどの扱いはされていない。当時において和歌と書は切っても切れない関係にあり、歌人を能書としても評価する傾向があったようである。貫之の名を多くの古筆の伝称筆者として冠することからも、詩歌と書の関係は強固なものであったといえるであろう。

今後の課題となるのは、聖徳太子や菅原道真の捉え方である。聖徳太子は日本史においてさまざまな角度からの議論が未だ尽きないが、書道史では、我が国現存最古の肉筆遺品「法華義疏」は聖徳太子筆とされており、些か出来すぎな観は否めないものの、まず一応落ち着いている。しかし、今回扱った古書論には聖徳太子の名は一切見えない。書道史においていつ頃から聖徳太子を尊崇する機運が生じたか、明らかにしていくことは今後の課題となろう。古来の伝承をそのまま今日まで受け入れてきたということではどうやらなさそうである。聖徳太子が伝説的であることは前提とした上で、遺墨の現存する聖武天皇や最澄が、古書論で取り上げられないのは何故であろうか。

他方、道真についてはその真筆が伝わらないことが返す返すも口惜しいことであるが、古書論を読む限りにおいて、往時の人々は、道真の真筆、あるいはそれに近いものを見ていたように思われる。さもなくば、『夜鶴庭訓抄』にて空海・小野道風とともに「三聖」と総称されたり、『入木抄』にて道真のことを「聖廟」と称し、「聖廟以後野道風相続す。此の両賢は筆体相似たり」と述べることはないと考えられるからである。

続編では藤原公任・藤原行成といったあたりからまとめていく予定である。能書列伝を端緒として、日本書道史を再考する契機となればと思う。

【参考文献】

《全集・叢書》
『書道全集』　平凡社　一九五四～六一、六七～六八
『定本書道全集』　河出書房　一九五四～五七
『書道藝術』　中央公論社　一九七〇～七三
『書の日本史』　平凡社　一九七五～七六
『日本の書』　中央公論社　一九八一～八三
『書の宇宙』　二玄社　一九九六～二〇〇〇
《単行本》
中田勇次郎編『日本書人伝』　中央公論社　一九七四
小松茂美『日本書流全史』　講談社　一九七〇
春名好重『日本書道新史』　淡交社　二〇〇一
石川九楊『日本書史』　名古屋大学出版会　二〇〇一
古谷　稔『中国書法を基盤とする日本書道史研究』　竹林舎　二〇〇八
《図録・事典》
『日本の書』　東京国立博物館　一九七八
『詩歌と書　日本のこころと美』　東京国立博物館　一九九一
『和様の書』　東京国立博物館　二〇一三
小松茂美編『日本書道辞典』　二玄社　一九八七
石田肇・澤田雅弘他編『書の総合事典』　柏書房　二〇一〇

【付記】
図版掲載に際しては、京都・青蓮院、宮内庁書陵部より御高配頂いた。茲に記して、深甚なる謝意を表する。

（平成二十八年九月三十日受理）